

---

# タイトル未定

ケロい人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タイトル未定

### 【NNコード】

N4649N

### 【作者名】

ケロい人

### 【あらすじ】

皆様の作品を読ませていただきていたらつい自分も書きたくなった。

勢いで登録し、勢いで投稿。

後悔もしてるし、反省もしている。

ある程度まではストーリー構成はできているので、ゆっくり投稿していければな」と思っています。

ところでプロローグ時点ですでにプロットからかなりズレがでちゃ

つてゐるんだけど・・・今後どうするかな。。。

本編開始と同時に前書きにキャラ崩壊が。ご注意ください。

最近小説の書き方をネットで調べつつロジロジがんばっています。  
そこで見つけた「小説を書くときのタブー」に思いつきり該当して  
ましたヽ( へ oへ )ゝ

更新は不定期です。

## プロローグ（前書き）

物語の舞台となる世界について？

## プロローグ

遙か昔、世界の霸権をめぐる戦いがあった。

神と魔。戦いは熾烈を極めた。しかし、その戦いは第三の勢力の出現によりあっけなく終わりを迎える。

両者の力の衝突による滅びを回避するため、世界が生んだ最強の力、竜。

その牙は堅牢たる神の守りを容易く打ち砕き、その鱗は魔のもたらす破壊をその身に通すことはない。

竜が行うは「戦い」ではなく「蹂躪」。

世界は他を省みない神魔の存在を許さない。逃れることのできない滅亡を悟った両陣営は自身の後継たる者として新たなる種を作り出す。エルフと魔族。

そして、神と魔は自らの子となるものに世界を託す。

神はその身を純然たる力として世界を満たす。その力は後にマナと呼ばれることになる。

魔は残りの力を結集し、己が末裔たる物の血に呪まじないをかける。

これらの行いに心打たれた世界は神と魔の滅びをもつて戦いを終わらせる。

調停の役目を終えた竜は世界の意思により残された種を監視すべく獣人を生み出す。

同様の事があれば次こそ滅ぼしつくすために。

そして自身はこことは異なる己の世界へと戻り眠りにつく。

世界は次なる支配種として人間を生み出す。

しかし人間は非力な生き物であった。

世界に残ったエルフ、魔族との競争に彼らは間違いなく適わない。

いや、そもそも荒廃した今の世界では生き残ることさえ難しいだろう。

度重なる衝突により溢れた破壊と憎悪の力は強く残った。世界や竜

の力をもつてしても浄化することさえ困難なほどに残滓がある。  
それはマナに影響を与えた魔物を生み出したのだ。

世界は神によって残されたマナが狂うのを抑止し、人間を守護する者として精霊を作り上げた。

そして一つの時代が終わり、新たなる時代が幕を開ける。

## プロローグ（後書き）

次から本編へ。

舞台はこの数百年後。

魔法と魔法科学が発達した世界。

中世レベルの社会なのに過去の戦争の傷跡として、戦争関連の技術

がロストテクノロジーとして残る。

矛盾爆発は不思議世界。

大丈夫、その謎はきっといつかなんとかします！

## 第1話「収穫祭（フェスト）」（前書き）

プロローグで力尽きた作者です。  
もひゅうつとがんばります！

## 第1話「収穫祭（フェスト）」

ここはインハルテ領。その中でも都市を遠く離れた小さな人間の農村。

その日の村は活気に溢れていた。

収穫祭。

作物の無事の収穫を精霊様に感謝を捧げる日。

そして僕ことウィルフレド＝ズイーベンの誕生日もある。

ズイーベンの名は人間の貴族の一家だ。

最初に生み出された人間を祖に強く力を引いた家系。

AINTS、ツヴァイ、ドライ、ファイア、アハト、ノイン、ズイーベン、ツヴァンティッヒ。

元は10貴族だったらしいが、国の衝突や災害、後継者の死去により消えていったそうだ。

今日は朝早くから家族・うちは両親と兄、妹の5人家族だけで収穫祭の準備をしていた。

貴族とはいっても昔の話。うちはとっくに落ちぶれ今となつては人口50人にも満たない小さな村が2・3ある首都から遠く離れた田舎の弱小領主だ。

僕のことなんかおいておいて話を戻そう。

この村では収穫祭といつてもそれほど盛大に行う訳ではない。

広場に集まつて、村総出で食べ物や酒を持ち寄つて精霊様に感謝をささげる。

子供の僕たちにしたらちょっと豪華な食事ができる村のパーティー。母さんなんかは、「用は・・・村を挙げての飲み会」と毎年めんどくさがつてゐる。

不信心ではあるけど・・・うん、村の女の人は総出で料理の準備があるもんね。しかたないね。

都市のほうでは、近くの村もすべて集まつて収穫祭を祝うとか。

そうそう、こんな小さな村だから、僕の誕生日なんかも村総出で祝つてくれる。

・・・・・・・・・・。

うん、収穫祭で酔っ払さかづけたみんなに弄くられるだけなんだけど。去年は村の酔っ払いオヤジ集団全員から類たぐいずりされたなあ。

うん、やめておこう。心の毒だ。

まあ・・・普通のプレゼントだつてもらえるんだけどね。

今年は飲んでる集団には近づかないでおこう。

好意なのは分かるけど・・・ね。僕、こう見えてナイーブなんだ。

気付けば日も暮れ、収穫祭も終わりを迎へようとしたとき

カーン、カーン、カーン

と、非常事態を告げる鐘が鳴る。

一瞬で広場に緊張が走るのが分かる。

「ねえ、父さん・・・何があつたの？」

僕は恐怖に駆られ父にすがり付く。

「大丈夫だよウイル。小さな村だけど、ここの守りは堅いからね。  
魔物モンスターや、ちょっとした盗賊くらいならなんとかなる・・・か・・・・  
ら」

と、そこで父の声が途切れ。

すでに広場まで敵が侵入してしゆりいたのだから。

それも、魔物でも盗賊でもない、組織的な動きをする何かが。

鐘の音が鳴つてすぐに広場は血に濡れた全身鎧の騎士達に囲まれて  
いたんだから。

「バカな！？収穫祭ではあつたが村には警備を十分に置いていたんだぞ。」

すると騎士たちの後ろから男が進み出てニヤニヤと気味の悪い笑み  
を浮かべ語りかける。

「これが墮落しきったインハルテと我々帝国の勇士との差ですよ  
男は笑いながらこちらに向けて何かを放り投げる。

「ひつ」

周りからか細い悲鳴が聞こえる。

僕が男の投げたものに目を向けると・・・そこには村の守備隊の隊長だった男の首があつた。

「あ・・・、ああ・・・」

僕は先ほどから震えが止まらない。

しかし、それ以上に何も声をかけてくれない父に縋るよう・・・。

見上げた先に父の首はなかつた。

後ろからケラケラと甲高い笑い声が聞こえる。

恐る恐ると後ろを向くとそこには

「お探しのものはこちらかな。落ちこぼれのズイーベン家のお坊ちゃん。くつ、くくく、はははははははは」  
堪えられなくなつたとばかりに高らかに笑う。

彼の手には何かがある。何か。先ほどまで僕に笑いかけていた父の絶望に染まつた表情の頭が。

「あ・・・、はは。ははは。ははははははは」

「くつ・・・くくく。はは。ヒヤハハハハハハ」

僕は壊れた人形のように涙を流しながら笑い、彼はそれを楽しむかのように高らかに笑う。

そして彼は告げる。

「さて皆さん、今日からこの村は私、帝国の人体強化実験場と成ります。抵抗したい方は頑張つて下さい。ただし・・・簡単には死なせてあげませんけどね。ヒヒ・・・ヒヤハハハハハハ。」

圧倒的だった。魔法を使おうとするものはその詠唱を終える前に首が飛ばされた。

詠唱の時間を稼ごうにも今の彼らは武器がない。

持つても守り刀であり、力の差は定かであつた。

その日、インハルテの端にある小さな村が地図から消えた。

## 第1話「収穫祭（フェスト）」（後書き）

名前がヒドい・・・だって?  
思いつかなかつたんですね。orz

## 第2話「実験場（フラスト）」（前書き）

各陣営一人ずつしかまだ名前がでてませんね。  
誰かかっこいい名前をおしえてください。○rn

## 第2話「実験場（フラスコ）」

あれからどれだけ時間が経つんだろう。

覚えているのはあの日、村の戦える者すべてが挑み、首が落とされた。それだけだ。

しかし、首が落とされても開放はされない。

彼のつれてきた帝国の騎士に斬られた者はすぐには死ねないらしい。  
血呪剣<sup>ブラッティーカース</sup>という神魔の時代の呪具を参考に帝国が作り上げた禁忌の武器。

彼の軍団の持つ武器はすべて悪魔との契約により、その呪<sup>まじない</sup>が付与<sup>さ</sup>れていて、斬つてから10回日<sup>キメラ</sup>が昇るまでは灰になろうと再生し、死を許さない。そして10度目の日の出と同時に魂もろとも焼き尽くすと言われる黒い炎に包まれて消えるのだ。

曰く、10日目に対象の魂を喰らいに悪魔がくるのだとか。

言つまでもないがすべて実験は始め彼らに施された。

実験、つまり合成獣実験、機械強化兵士実験、魔力拡張実験、異種交配（ハイブリット創造）実験だ。

帝国がエルフ、魔族に戦いを挑むための戦力を充実させるための狂気の実験。

合成獣実験とは、魔物の持つ力を人に宿すためその細胞を移植する実験。

機械強化兵士実験とは、人の身体<sup>からだ</sup>に神魔時代の伝承に残る呪具を参考に作られた魔器を埋め込んだり、脳に電子頭脳を埋め込み本来のリミッターを外すことで本来の肉体の限界の身体能力を發揮することができる兵士の製造実験。

派生として、リミッターを外しての戦闘に耐えうるだけの肉体強化を施す実験。

魔力拡張実験とは、世界に満ちたマナを人間の身体でエルフ以上に

扱えるように作り変える実験。そして、魔族に宿る血を人間に宿す実験。早い話、人にその血を混ぜることことでその力を取り込む実験。

最後に異種交配実験。生まれながらにエルフ、魔族の特性を備えた人間を生み出す実験。

さらつてきたエルフ、魔族との交配実験。

結論から言おう。

村が帝国に襲われてから早1ヶ月。

すでに残っているのは僕を含めて5人だけ。

最初の10日で奴等に挑んだ20人が黒い炎に包まれていなくなつた。

次の7日で10人が死んだ。魔力拡張実験組だ。神の生み出したエルフの加護に、魔族の魔が残した血に耐えきれなかつた。

その5日後7人が死んだ。機械強化兵士実験組だ。あるものは魔器の力に耐え切れず、またあるものは電子頭脳の命令に脳が耐え切れず、耐えられたものも、肉体の限界を超えた実験により死に至つた。そしてさらに8日後、8人が死んだ。

合成獣実験により魔物の細胞を移植された3名が生前の意識を完全に失い、魔物としての破壊衝動に駆られ、コントロールを外れ暴走を始めたのだ。

鎮圧の為、機械強化兵士の実験体が2、暴走に巻き込まれた合成獣実験体3。また、帝国の兵士も3名死亡、5名負傷の惨事となつた。残つたのは、身体強化実験とエルフの血を与えた魔族。合成獣の暴走で生き残つた試験体が1人。完成された機械強化兵士が1体。異種交配実験で壊れてしまつたのが2人。

偶然か、生き残つた合成獣試験体は兄さんだつた。

母さんたちは・・・すでに死んだんだろう。

でも・・・その方が幸せなのかもしれない。

今の実験への呼び出しに震えるこの日々が続くよりは。ねえ、兄さ

ん。

そして今日。帝国の襲撃からすでに1ヶ月半。

僕に新しい実験が施されることになる。

合成獣実験、機械強化兵士実験、魔力拡張実験だ。

3つの複合実験だ。

すでに僕に施されている身体強化とエルフの血の配合と合わせると交配以外のすべての実験をその身に施されることになる。

きっとこれで楽になれる。

やっと僕はこの恐怖から自由になれるんだ。

麻酔をかけられたのか意識が遠くなる。

遠くなる意識の中、誰かが僕に「ヤーヤ」と嫌らしい笑みで声をかける。

「安心して。君は殺しないよ。君は実験の成果として生きてもらわないと困るからね。だからね、今回は君の左腕に処置を施すよ。失敗してもそこらへんに転がってる左腕を適当につなげてあげるから安心していいよ。ヒヒッ、ヒヤハハハハ」

## 第2話「実験場（フラスコ）」（後書き）

改行とか段落とか苦手なんだ。

ワードパットで作ったの貼り付けてるだけだからどうなってるのか  
見るのが怖いへへ

## 第2・5話「兄弟」（前書き）

短い・・・あまりの短さに泣いた・・・

僕が気が付いたのは冷たい床の上だった。

「そうか・・・まだ死ねないのか」

一人呟く。

重い瞼を開け厳しい現実に目を向ける。

そこは見慣れた実験体の監禁部屋。

村の重犯罪者監禁用の牢獄の中。

変わったことといえば・・・ここにはすでに僕と兄さんの2人だけだつてことか。

「兄さん・・・僕達2人が残っちゃつたね。」

眠つているのか死んでいるのか・・・何の反応も示さない。

僕があの実験を受けてどれだけの時間がたつたんだろう。

僕は兄さんに目をやる。

兄さんの変化は顕著だつた。

すでに人としての原型が残つているのはその顔のみ。

角がある、コウモリのような翼ある。ヘビ尾を持ち、体は鱗に覆わ

れている。牙だつて生やしている。

しかしそれ以上に全身に残る傷跡。特に腹部にある大きな穴が何より痛々しい。

僕が複合実験を受ける前は兄さんは普通の人間の容姿だつた。

少なくともこんな傷なんて、腹部に穴なんてなかつた。

僕が眠つている間にまた暴走でもあつたのか、はたまた兄さんに施された実験がそれほどまでに過酷であつたのか、自分で死のうとしたのか。

「ねえ、兄さん。兄さんはまだ僕の兄さんのかな、生きてるのかな。ねえ・・・兄さん、僕が殺してあげようか」

第2・5話「兄弟」（後書き）

タイトル募集しています！

### 第3話「調停者」（前書き）

プロローグで出ていた調停者（竜）が早くも登場。

本当に登場するだけ。活躍はもう少し待つてあげてください！

別世界に存在する竜と意思の伝達が行えるのは竜の生み出した獣人のみです。

また、その力ゆえにこの世界への干渉は限られている。

現存する調停者は5人。

いつかでてくる！

### 第3話「調停者」

「成功だ、実験は成功だ。いやはや、思いもしなかった収穫だね、これは。ヒヒ・・・・ヒヤハハハハ」

男は高らかに笑う。

「ノイラー様、それほどまでに順調なのですか？」

騎士の一人が彼、ウイルの父を殺したリーダー各の男に声をかける。

「ええ、まだ不安定のようですが、意識は取り戻しましたよ。いやはや、意識を取り戻すだなんて思いませんでした。人形として本国で研究するつもりでしたが、まだまだ楽しめそうです」

ノイラーと呼ばれた男はいつもの笑みでそう答える。

「それで・・・僕達の会話中に何の用なのかな？許可を出した覚えはないんだけど」

先ほどまで一人しかいなかつた部屋に一人の少女が現れる。

「申し訳ありません・・・」

ひざまずき謝罪を述べる少女を蹴り飛ばす。

「以後気をつける」

少女は生氣のない瞳で男を見つめ何の感情もなく答える。

「申し訳ありませんでした、ノイラー様」

「それで・・・用件は？」

「はつ、こちらに向かってくる獣人を確認しました。分かっている数で獣人15。そして、まだ未確認ですが獣人とさえ比べ物にならない巨大な魔力が接近しています。」

「ヒヒ・・・・ヒヒヒヒヒヒヒ。獣人が来るのが遅いとは思つたが、なるほど。調停者にでも救援を求めたか。まあ、エルフに魔族までさらつてゐるしな。実験が知れれば全力でつぶしに来るのは当然のことか」

「如何なされますか？」

少女は男の指示を仰ぐ。

「お前は騎士団に付き獣人の相手をしろ。可能であれば捕獲しておけ。最悪死体でもかまわん。捕まえ次第戻つて来い。俺は調停者かもしれない者に興味がある。では行け」

「御意に」

「ノイラーント様の為に」

瞬きひとつもしないうちに部屋から一人の姿が消え、静寂を取り戻す。

「さて・・・仕上げの準備をしましょつか。ははっ、ヒヒヒヒヒ

――――――――――――――

――――――――――――

「（）か・・・。血の臭いがキツイな。」

ロープに身を隠した何者かが帝国によつて荒らされた村へと足を踏み入れる。

全身がロープに隠しているにもかかわらず、その凹凸によりが女性だということが分かる。

「任務は・・・つと」

彼女は今回の任務を思い出す。

- 1、誘拐されたエルフの保護
- 2、誘拐された魔族の保護
- 3、襲われた村人の保護
- 4、事件に加担したものの処断
- 5、調停者の痕跡は残さない

「はあ・・・」

何度もとも知れないため息をこぼす。

1～3はともかく・・・問題は4、5か。

加担した者の処断つて言つてもどこまでが加担した者なのか分から  
ない。

痕跡を残すな・・・つて言つたつて。

用は誰一人絶対に逃がすなつて言う事だ。

今回で言うなら

エルフ、魔族、被害にあつた村の住人の記憶の改竄。  
事件に直接加担したすべての人間の排除。

「はあ・・・」

考えるだけで気が重い。獣人も最高ランクとは言わないも一流の実  
力者を集めた。数だつて十分のはずだ。

だが、村に着いてからずつといやな予感がしている。

「私のイヤな予感つて当たるのよね。大体なんでわざわざ・・・」  
と愚痴を零していると、村に入つてから感じていた不快感がいつそ  
う強くなるのを感じた。

「なに? 人間がこの私に魔力干渉でもしようつて言つの? でも・・・  
おもしろいじやない」

意識を集中させる。

不快感の元、きっとこの事件の元凶であるう何かがいる場所を探す  
ために。

-----

### 第3話「謹慎者」（後書き）

各話の一つずつが本当に短い。  
もっと長くしたいけどそんなスキルはないんだ。。。  
読んでもわからぬけど書くのって難しい。  
一日何話も更新している筆者さんってスゴい。

### 第3・5話「実験の成果」（前書き）

作者は誘いだされたんダーネ！

ちなみに飲み会に誘い出されました。

きっとバレてると思うから素直に白状します。

この4話。元々は3話として一緒に投稿するはずだったんだ。

そしてこの3・5話、まさかの（？）ノイラー様視点。

作者の気分次第でかませ犬にもラスボスにもなれそうな彼。

ノイラーさんの明日はどっちだ！

### 第3・5話「実験の成果」

「さて、そろそろ来てくれるころでしょうかね、ヒヒヒ  
彼が今いるのは村の広場だつた場所。今では実験で使い物にならなくなつた死体ゴミを置いておく場所。

「もうすぐ来てくれるのですね。ああ・・・愛しの調停者エラゴニア」  
村人だつたモノに囲まれ私は待つ。

もう来てくれるであろう私の実験の最後の素材バーツが。

・・・とそこで思い出す。

「ダメですね私は、興奮サンブルのあまり大切なことを忘れていました。本国にタイプ合成獣の成果を一つくらいは送らないと何を言われるとか」

そう呟き彼は今回の実験の成果に満足げに笑う。

そう、今回の実験は非常に有用な結果を残した。

未だ不安定ながらも生きた合成獣が1体。

魔器の埋め込みと電子頭脳によるリミッター解除。この二つが共に正常に機能している機械化強化兵士が2体。

新しい発見として、異種交配を行つた素体に魔力拡張実験を行つことで受け入れられる血の限界量が増える事がわかつた。

それになんといつても彼だ。

複数の強化実験を受けてなお生きていると言つた事実。

私の仮説は正しかつた。

後は素材と時間があればいい。

そして素材は自らこちらに来てくれるんだから。

笑いが止まらないのは仕方ないだろう?

と考え事に耽つていてるといつの間にか彼の横には例の少女が現れる。

「お待たせしてしまい申し訳ありません。獣人を回収してきました」  
インハルテ特有の白を基調とした民族衣装に包まれた、背の低い、少女。

彼女は自分の倍以上ある獣人を軽々とこちらに背負っている。

そう、彼女こそつい数日前にこの村で生まれ変わった機械強化兵士、  
I <sup>アイ</sup>

今まで素体として扱ってきた中でも桁違いの魔器との適合率。  
もはや天文学的な確立である「魔器を取り込んでもマナを使えると  
いう奇跡。

「ほう・・・さすがだな。ではその獣人の血を例の合成獣に。これ  
であれば安定するはずだ。その後、共に一足先に帝国に戻れ」

「はっ。ところで・・・合成獣だけでよろしいのですか？ノイラー  
ト様のお気に入りはいかがいたしましょう」

私のお気に入り・・・複数の実験に耐えた例の少年の事だろ。

「かまわん。今回の実験で複数の強化を組み合わせる事で生存率を  
上げることができる・・・と言つ事がわかつた。それにもうあれは  
間に合わん。今頃は付加された力どうしが反発しあいつているこ  
だ。どれだけ急ごうが帝国まで持たないので連れ帰る意味がない」  
与太話は終わりだとばかりに私は話を打ち切る。

アイと呼ばれた少女もその意図を理解し、命令に則つて動き出す。  
アイがこの場を去り少しすると破壊音と共に念願の調停者が現れた。  
私はすでに準備していた言葉を彼女にかけることにする。

「ずいぶんお待ちしたんですよ。待ちくたびれてしまつたではあり  
ませんか。人を焦らすのがお好きなんですか？」

### 第3・5話「実験の成果」（後書き）

今回はウイル君の同郷の機械強の兵士エちゃんが少しだけ詳しく描写されましたね。

彼女の着ていた民族衣装ですが 陰陽師狩衣をイメージしていただけたら。

なんとかファ タジア文庫のなんとかイレガ ズのに出てくる式神の口 ちゃんの服。

え？ アウト？

「めんなさい。」

次回、ノイラート様のファーストネームがやつと発表できる一  
え？ どうだつていい？  
そうですか？

## 設定資料（本編前）（前書き）

これを一番最初に投稿してたらグダグダな私の作品も少しほは読者様に楽しんでいただけたのでは?と反省。でもネタバレなんだよな。。。

## 設定資料（本編前史）

「種族（創造主）」

人（世界）、エルフ（神）、魔族（魔）、獣人（竜）、精霊

「世界」

物語の舞台となる世界。竜と魔の戦いの余波により消滅の危機を迎える。

消滅を防ぐために竜を生み出した。

「神」

世界が初めて最初に繁栄した種族。人の前に世界の祝福を受けていた種族。

世界樹と呼ばれる神木より生まれるマナを取り込むことでその命を維持し、それによって奇跡を行使した。

「魔」

元々は神と同じ種だったもの。先天的にマナを取り込むことができず、神の都を追放されたものたち。

マナの枯渇による死を待つのみだったが、生き残るために同じ追放者を喰らう事で力を蓄える。

同族を喰らう事でその血は穢れ、神を喰らう事でマナをその身体に取り入れられるちからをもつようになる。また、喰らう事で対象の力の一部を取り込むことができる

「竜」

神と魔の戦いによる世界の消滅を回避するために世界が生み出した生き物。

その爪は神の堅牢なる守りをたやすく打ち破り、身に纏う鱗は魔の破壊を通さない。

マナの干渉を受けないため神と魔にとつてまさに天敵。

「奇跡」

神が使つていたとされる魔法。

攻撃より守りに強い。

魔に落ちた者の襲撃から身を守るために発展。

「魔呪」

同族を喰らい血が穢れしていく中で目覚めた力。

その呪われた血を触媒に奇跡を起こす。

別に使用の際に血が要る、とか使つた分また取り込まないとという事はない。

怨念が血に影響し力となつてゐるため、喰らつ分だけ強い力を發揮する。

ただし、あまりにも強い力の行使は肉体が持たず発動と同時に消滅する。

「神魔戦争」

かつてあつた神と魔の戦争。

世界を消滅の手前にまで追い込んだ。

世界が竜を生み神と魔が滅びた事でやつと幕を閉じた。

その余波による世界の荒廃はすさまじく、今なおその傷跡は消えていない。

「人間」

世界の祝福を受け、今代の繁栄を約束された種族。  
存在としてはひ弱だが世界によるひいきで多種族と同等か、それ以上に戦える。

＜＜エルフ＞＞

滅びの運命を悟った神が作り出した自分たちの後継たる種。神の生み出した種であるためマナの扱いが得意。

＜＜魔族＞＞

滅びの運命を悟った魔が作り出した種。魔の呪われた血を一部引き継いでいるためマナの行使はできない。しかし、その血に残る魔力は十分に強大。

＜＜獣人＞＞

竜が生み出したとされる種。

神と魔が滅び、竜の去った世界の監視をつかさどる。

他種に比べ、数が少ない。

魔法は一切使えないが、強靭な肉体と魔法耐性をもつ。

調停者（竜？）との連絡を取ることのできる唯一の種族。

＜＜精霊＞＞

世界が残されたマナを元に作り出した擬似生命。

基本的に精霊は不滅だが、一度狂った精霊が正気を取り戻すことはない。

精霊には二種類の存在がある。

＜精霊＞

主に世界の管理、人間の絶対数の保護、マナの監視を担当。

＜守護精霊＞

人間と契約を行い、魔法の補助を行う。

生まれてすぐに何れかの精霊に見初められ契約がなされる。

重複契約はなく、人が生涯契約できる精霊は一匹だけである。

特別な身体能力も血も持たず、マナの操作能力の欠ける人間固有の力。

「魔物」  
神と魔の戦いによって生まれた憎悪に影響されて発狂した精霊、動物の総称。

魔物は周囲のマナを糧に成長し強くなる。  
多種族を捕食することもある。

「魔法」

魔法とはすべての奇跡の総称。

すべての魔法は使用する力の源や使い方が異なるだけで使用法や起こすことのできる現象に差はほとんどない。

「種族別使用可能属性」

神、魔の時代には存在しなかつた概念。

神、魔は属性に属性に関与せず、力しだいにでもできていた。  
種族によって行使できない魔法の属性がある。

「人間」

精霊による。ただしその特性ゆえ、契約した精霊の持つ属性以外は行使できない。

「エルフ」

火、水、地、風、聖

「魔族」

火、水、地、風、闇

＜獣人＞

プロテクション

相手の一定値までの魔法を弾く。個体差が大きい。

魔法の使用自体は不可。

＜魔物＞

元となつたモノの属性に順ずる。魔物のみ、後天的に属性を得ることがある。

＜＜呪具＞＞

神魔の時代に、数で劣る魔が神に勝つために作り出した武器。狩つたモノの力の半分を自身に、残りの半分を使用者に付与する。呪具により狩られたものは輪廻に戻ることはなく、その武器にとりわけ続ける。

全5品が作られたらしい。

＜＜神器＞＞

魔の呪具に対抗すべく作られた武器。

数多く存在したらしが、すべて失われたと伝えられている。

＜＜竜具＞＞

死した竜から作り出したといわれている武器。

＜＜魔器＞＞

伝承に残る呪具と神器を参考に作り出された帝国の武器。

素材、  
工程すべてが  
謎。

## 設定資料（本編前記ひがき）（後書き）

作者は夏休みの予定を一口かけて考えて満足するタイプ！！

## 第4話「襲撃」（前書き）

今回は調停者の竜様の視点です。

名前？彼女は今のところMOBキャラなんだ。。。キャラ設定が少しあるだけのただのMOB。

いつか・・・いつか彼女にもスポットが当たる日がーー！

## 第4話「襲撃」

視界に標的を捉えた。

距離にして約200メートル。

私はそれを観察する。

腰まで伸びた白い髪、ただ一人防具を一切つけず黒い軍服を着ている。そして・・・彼の腰にかかる禍々しいと言つ言葉では足りないくらいに穢れた剣。

聞いていた特長に合致している。

10年ほど前から世界の理を乱す実験を行つてゐる男。

これまで多くの獣人を送り込むも戻ってきたものは皆無。

「やつと見つけた・・・こんな所に長居はしたくないから・・・、速攻で決めさせてもらうわ。5秒もあれば十分かしら」

私は身に宿した竜としての力を解放する。

5秒。それは今のが彼を殺すのに必要とするであろう時間。今、力を解放したのに1秒。

男を殺すため、彼女本来の腕も顕現させるのに2秒。距離を詰め、切り裂くのに2秒。

加減なしに跳んだのが悪かったのだろう。

私が先ほどまでいた民家は跳んだ際に発生した衝撃派ソニックブームによりあっけなく崩れる。

後5メートル。この男を始末したら残りは獣人に任せてゆっくりと・・・!?

先ほどまで私に気付いた素振りもなかつた男がいつの間にかこちらを笑いながらみている。

目が合つた・・・気味が悪い。

「ずいぶんお待ちしたんですよ。待ちくたびれてしまつたではありませんか。人を焦らすのがお好きなんですか?」  
気付かれていた!?

でもそんなことは関係ない、これで終わりなんだから。

超音速のスピードを乗せ放たれる神速の技。

私の持つ最速にして必殺の一撃「竜爪一閃」。

逃れる術はない。

しかし、私の爪が彼をいまにも引き裂こうとした瞬間<sup>とき</sup>、男と私の間に小さな影が現れていた。

それは、あらうことか私の一撃を受けとめる。

「なつ、今を止めるつて言うの！？」

私は驚きを隠せない。

それが「」に現れるまでソレの接近に私は気付かなかつたのだから。それに”受け止めたられた”・・・という事実。私は久しく感じることなかつた感情が湧き上がつてくるのが分かつた。

受け止められた・・・つまり私の動きに、それも”後出し”で対応できるスピードと実力、そして、同族である竜の鱗をも碎く竜爪の一撃を耐える何か。

最高じやないか。神、魔との戦い以降出会つたとのなかつた強敵との遭遇。

私はその強敵の姿を確認すべく距離をとる。

立ち上がつた砂埃のせいで容姿は確認できなかつたが、それは私の肩ほどしかない小柄な体躯をしている事が分かる。

やがて砂埃も収まつてきたころ、なおも余裕を崩さない男と、その男の横に控えるように立つがたいの良い赤黒い鎧の騎士風の男、そして生氣の抜けた顔でこちらを見るボロを纏つた少年の姿が現れた。

「それで・・・せつかくの楽しみを邪魔するほどの用はなんなのかな、ヴァルトヘルト隊長殿？」

ヴァルトヘルトと呼ばれた騎士風の男は答える。

「ノイラー様、獣人の殲滅完了しました。」

「そんなん！？」

私の叫びなど聞こえいかの用に彼等は話を続ける。

「そんなどでわざわざ？」

「いえ、本国より一度帰還するようとの伝令を受けました。どうやらアレの実用化の最終チエックを行うようで、閣下からの直々の命だとか」

「そうですか・・・閣下の命であれば逆らえませんね。」

今回の私の標的であるノイラーートと呼ばれた男は私を見やり、声をかける。

「残念ですが、私にはあなたのお相手をする時間は無いようです。変わりに彼を置いていくので勘弁してください。彼は今回の実験の最高傑作にして最高欠作。退屈はさせません」

「それを私が許すとでも？その男の言っている事が本当なら獣人の敵も取つてあげないといけないしね」

私は世界に許可されている上限まで竜の力を解放する。

この男を逃がしてはいけない。この男を見てからといつも警鐘が鳴り止まない。生かしていてはならない、存在を許してはならないと本脳が訴えかける。

私は目の前の二人を同時に屠るべく斬りかかる。

先ほどと速っこ変わらないものの、繰り出す一撃のうむ破壊は圧倒的に違う。

先ほどまでの顯現とは違い、腕のみではあるものの本来の竜としての力を宿す・・・言うなれば召喚。

その一撃は国一つ易々と破壊する力を持つ。

このあたりは焦土になるだらうけど・・・この男を逃してはそれ以上荒廃が生まれる。

私の一撃は彼らを肉片一つ残さず消し去る。

そのはずだった。

しかし、竜としての本来の力を解放しているはずの私の一撃を軽々と受け止めるものがいた。

うつろな目をした、先ほど私の一撃を止めた少年だ。

「ははは、彼は強いですよ。今回の実験の最高傑作であり、最高欠作なのですから。それでは、後は任せますよ。またある事があれ

ば、次は最後まで邪魔されずに楽しみたいのです」「言い残し、ノイラーートとヴァルトヘルトが消える。

反応は・・・まだ追える。田の前の少年をすぐに始末さえできればまだ追いつけるか。。

私は目の前の少年に意識を集中させる。

これで何合戦になるか、私は少年と切り結ぶ。

すでに逃げた二人の気配は私の近く範囲から消えている。

彼と戦切り結ぶうちに気付いた事がいくつかある。

一つは、彼が私の攻撃を受け止めるのはその左手のみ。また、受け止めているように見えてはいたが正確にはそうではないようだ。斬つた先からすぐに再生され、威力を殺されているといつ事。

一つ、確定ではないが超再生は左腕だけに適応されているようであること。その証拠に、左腕以外なら普通に斬れる。すでに彼の右手を切り落としてからだいぶ立つのに一行に治る気配は無い。

そして最後に・・・彼に流れる血が私でさえ知らない何かであると。ただそれが非常に不安定であることだけは見て取れる。

人間の赤い血のはずなのに、呪、精霊の残滓を感じる。

血液から精霊の残滓を感じるなんて魔物くらいしか・・・。

とそこまで考え、私はやつとのこと答えにたどり着く。

「ひどいことするわね。あなたを残していったのもあなたの身体がもう持たないと分かつての事・・・か」

私が呟くと同時に彼の姿がブレ始める。

限界が来たのだろう。

血の結合による力の衝突。その余波による肉体の崩壊。

その身体は形を維持することもできず解けるて消える。

まあ・・・これだけ混ぜられれば短時間とはいえ私に対抗できるか。

私はこの場を後にする。

逃げた二人を探すため。

大体の方角は分かつてゐる。

ある程度近づいたら氣配で分かるはずだから問題は・・・ないはず。

「急がないとね」

私はすでに液状化している彼に背を向ける。  
と、その時だ。

液状化し、すでに死んでいるはずのソレが動き私を取り込む。

「そつ、そんな。動けるはずが・・・」

振りほどこうとするもすぐに遅く、それに触れた部分から私の身体は溶かされていく。

鱗を顯現し、守りを固めようと、そのわずかな隙間から進入し、私を溶かし続ける。

すでに抵抗する力も無い。

徐々に溶かしていく激痛に意識を失うことさえ出来ず、死を迎える

そのときを待つことしか出来ない。

私は約一日をかけて溶かされていった。

その日、私は死んだ。

## 第4話「襲撃」（後書き）

調停者とは竜の中では一つの役職のよつなものです。

現在3柱の調停者が存在します。

調停者である竜が何らかの理由により失われた場合にのみ、別の竜が眠りから覚め、その役割を引き継ぎます。

細かな設定は徐々に明らかに・・・なるといいな。。。

## 番外編「インハルテの少女」（前書き）

本編で抜けている部分を少しでも保管するために生まれた番外編。ストーリー 자체はもともとあつたんだけど筆者のスキルじゃ本編にうまく落とし込めなかつたんだ。

他にも本編には出でない断片、投稿するに当たつて消えていった視点、ストーリーがたくさんあつたりします。うまく形に出来たらまた番外編・・・という形で投稿できたらと思います。

## 番外編「インハルテの少女」

その日はお母さんと収穫祭で振舞う料理を作っていた。できた料理は・・・私がお手伝いしたところは少し不揃いだつたりもするけど一応お母さんからは合格をもらつた。

私にとってはなかなかに充実した一日だつた。

お父さんたちは村の青年団——お父さんのどこが青年なんだろう——で集まって領主様達と一緒にビール呷つていた。

夜も更けてきたので私は家に帰つて寝るように言われた。

もう子供じゃないのに・・・。

でも、朝早起きしてずっとお料理してたせいか疲れは溜まつてゐる。

収穫祭は明日もあるもんね。

今日はもう休もう。

どれくらい眠つていたんだろう。  
外が騒がしい。

お父さんたちまだ騒いでるのかな?

私に早く寝るように言つといて・・・文句の一つでも言わないと気がすまない。

私は扉に手をかけ、みんなで騒いでいるであろう広場に足を進める。そこに待つ凄惨な景色など想像も出来ず。

私の目に映つたのはさつきまでお父さんたちと一緒にビールを飲んでいた青年団の人たち。

昔、名の通つた冒険者だつたと言つていた村一番の狩人のハンスさん。

・・・・の死体。その全員が全員血まみれで倒れている。あるものは胸に穴が、またあるもの上半身と下半身が繋がつていなかつたり、首が無い人までいる。

なのに・・・生きてる?

だって、息をするように胸は動いてるし、目の前に転がっているハンスの頭が私に「逃げろ」って話しかけているんだもの。

私はその光景に腰を抜かす。  
でも、そうか・・・夢か。

これは酷い悪夢だ。お料理のときにつまみ食いしたバチが当たつた  
のかな。早く田舎でいいなー。

私に誰かが近づいてくる

聞いたことの無い野太い声。

見上はるとそこには刃に血で真赤になつた鎌と元々血濁れた鎌を

男の手が私に伸びる。

そこで・・・私の意識は途絶えた。

目が覚めると私は村の重犯罪者用の独房の中にいた。

あれ  
・  
・  
・  
?  
あれ  
?

脚二頭筋の筋肉の一部である二頭筋の筋肉の筋肉

周りを見回すと数人の、見たことのある顔が。

語したのである

私は悪いとは思いつつも、自分が何でこんな所にいるのか聞くべく

近くに座り込む男の子に手を伸ばす。

同時に部屋のみんなが震えだしたのが分かる。

手を伸ばした男の子なんてひざを抱えてブツブツと何かを呟きだした。

驚いた私はとつさに伸ばした手を引っ込める。

どうしたんだろ？

足音は大きくなつて、ついには私達のいる牢屋の前で足を止めた。目を向けるとそこには、腰まで伸びる白い髪の端正な顔立ちの男の人。それと、その男の人につき従うように控える、全身を覆つ黒い鎧に包まれた黒髪長身の屈強な男の人。

「さて、次はあなたの番ですよ。ヴァルトヘルト、連れて行きなさい」

白い髪の男の人は先ほど私が声をかけようとしていた男の子に向かつて呟く。

「あ、ああっ・・・・・・」

男の子は声にならない声を上げ、かすかに抵抗する素振りを見せるも、牢屋に入つてきたヴァルトヘルトと呼ばれた男の人連れて行かれてしまった。

私はそれを止めようと声を振り絞るが、先ほどその男に見られた瞬間、頭の中は真つ白になり、震えが止まらなくなる。

乱れた息が収まらない。  
苦しい。

意識が朦朧とする。

薄くなる意識の中、私が最後に見たのは私に視線を向けニヤニヤと笑う白い髪の男の顔。

何かを告げられているのはわかるが、すでに何を言われているのか分からぬ。

ただその歪んだ笑みから、私にとつて良い知らせでないことだけは察する事が出来た。

次に私が目覚めたのは少し固いベットの上だった。

起き上がるにも何かで固定されているのか、身体は動かない。目だけを動かし辺りを覗うと、白い白衣を纏った男の人が4人いるのがわかる。

何か話し合っているようだ。

と、そこで私が目覚めたのに気付いたのかその中の一人、中でも若い男の人がこちらに近づいてくる。

「おはよう、意識を取り戻したんだね。でも、せつかく目覚めたところ悪いけど今から君は死ぬ。無事、次に目が覚めたとしてもそれはもう君じゃない。だから最後くらい君の親しい誰かに看取つてもらわないとね」

男が指差す先に目を向けるとそこには魔族に犯される母の姿があった。

「お・・・かあ・・・・・さん？」

すでにその目には光が無く、たまに喘ぎ声を上げるだけ。

「お母さん！お母さん！」

私はお母さんに出せる限り大きな声で叫びかける。

「ほお、お母さん、お母さんか。よかつたな、最後はそのお母さんとやらに看取つてもらえるんだ。でもうるさい、それと時間切れだ」首筋にチクつと何かに刺されたような痛みが走った。

「それじゃあ、おやすみ」

私の声は届かなかつたのは最後まで母の目が私を捉えることはなかつた。

そして、これが私の見た最後の光景になつた。

番外編「インハルテの少女」（後書き）

いかがでしたでしょうか？

蛇足だつたかもしれない。。。

今後も生暖かく見守つていただければ幸いです。

## 番外編「I（アイ）」（前書き）

以前でてきた機械強化実験を受けたノイラーに付き従う少女アイ。  
その雑すぎたの設定を保管するストーリーです。  
編集に5時間近くかかったよ。  
疲れた。。。

私の名前は I。<sup>アイ</sup>

帝国の機械強化兵であり、ノイラート様のお世話を命じられた彼直属の駒。

私が私として生まれたのはつい数日前。生まれて間もない私がノイラート様の、それも直属だなんてこの身に余る名誉なことだ。

なんでも今回の作戦において出来た兵で、ノイラート様が気に入つたものがあれば、一体だけノイラート様のものとして国に認められるのだと。

なかでも私は特別らしく、魔器を埋め込まれてなおマナを扱えたためにノイラート様に見初められたそうだ。

この条件があつたからこそ今回の作戦に参加したとノイラート様からは覗つている。

さて、数日前に生まれたばかりの私がなぜ帝国についてこれだけ詳しいのか少しだけ話しておこうと思う。

私達機械強化兵は、生まれたときからある程度の知識を持つている。

なんでもすぐにでも戦えるように、ある程度の情報は埋め込む電子頭脳に最初から刻まれているらしい。

この電子頭脳と言うのは絶大な力を持つ機械強化兵をコントロールするための、言わば首輪だ。

少しでも命令に逆らえばこの電子頭脳が脳を焼き切るのだと。

電子頭脳は埋め込んだ人間の脳を刻まれた情報通り上書きし、特定の記憶を持つ兵に作り変える。

また、その際にその身体のもつリミッターなどもすべて外してしまふらしい。

つまり、電子頭脳を埋め込むだけで超人が出来上がりつてわけ。

でもリミッターが外れた状態で全力を出したら、力に耐え切れずにすぐに身体が崩壊<sup>ダメ</sup>になる。

そこで生まれたのがこの機械強化。肉体を機械に作り変えることで生身では耐えることの出来ない負荷に耐える強靭な身体を得ることができる。

動力には魔器と呼ばれる帝国の最新の武器が使われている。

これは固体によつて異なるけど、私達はそれにより生きているし、その力がある程度扱える。

つと、少し脱線したかな。

とにかくこの電子頭脳のおかげで私達は生まれながらにある程度の知識を持つている。

中でも私は、ノイラー<sup>ト</sup>様の直属<sup>といひ</sup>と目覚めてすぐに追加で情報を刻まれた。

そして今日、この数日間戦闘訓練を受け続けていた私に新しい任務が与えられた。

さらに身体の一部に鱗のようなものが出ている。口元には牙だつて見え隠れしていた。

急ぎ報告を行うと、すぐにノイラート様に一部の騎士の立候いの元、彼の調査が行われることになった。

彼は研究室に運び込む間にもその身体を急激に変化させていて、すでに人間とは遠く離れた姿に身を落としていた。

そして実験室に着き、調査も終わりを迎えるとした頃、彼は急に暴れだしたのだ。

騎士たちが押さえつけようとするとそれを簡単に振りのける。

研究者たちの話を聞いていた限りだと、なんでも今まで与えてきた魔物の細胞が今になつて急に活発化し、今までの合成獣とは比べ物にならない力を持ちつつあるのだとか。

と、騎士を振りのけた合成獣はあるうごと/orノイラート様に襲いかかろうと飛び掛つてくる。

「エ、お前の実力一度見ておこう」

私はノイラート様の許可が聞こえると同時に躊躇も手加減もなく合成獣の腹をこの腕で貫き、地面に叩きつける。

「この程度直に回復するだろ。牢に戻しておけ」

そう言い残しノイラート様はその場を後にした。

合成獣の暴走の翌日には、すでに合成獣たる少年の傷はだいぶ塞がつていた。

残っているのは体中の小さな傷と、私のあけた腹部の穴。それもたつた一日で半分近くまでその大きさを縮めている。

驚くべきは、その力より再生能力ってことかしら。

それよりも今日はもう一人の少年に複数の処置を施す複合強化実験を行うらしい。今日も昨日と同じで、ノイラート様、騎士様を交えて行われるらしい。

左腕を除くの全身に機械強化を施し肉体の強度を上げ、その左腕には魔物の、いや、先日の合成獣の細胞を移植。合成獣の細胞が安定

する前に、魔血を一滴。

その後別室に拘束し、様子を観察する。

結果だけを言ひと、合成獣の細胞が魔血を取り込むという衝撃の結果に終わった。

一滴だけだったとはいえ魔血が取り込まれた。

その事実は長年携わってきた研究者たちにさえ強い衝撃を与える異例の結果だったのだから。

急ぎ彼の血を採取し調べるとさらに一つの事実が分かつた。機械強化で区切つたはずの左腕の合成獣細胞が全身を侵食していたのだ。

その強過ぎる細胞は彼を形作る境界線をも崩そつとしている。

彼は持つてあと10日。

それも戦闘に参加せずじまいもつていてだ。

戦闘に参加して、身体に不可をかけ続けようものならすぐに限界を迎へ、その身を文字通り無くしてしまつだろつ。

それゆえ、実験としては最高傑作、しかし戦闘に参加できない使えない欠品として欠作と呼ばれることになつた。

この翌日、彼は自身に移植された細胞の持ち主たる合成獣の少年を殺そうとし、隔離される事となる。

そして、私の担当する一人の少年の処置が終了したとして次なる命令を与えられる。

現在ノイラー様のいらつしやるこの村への侵入者の警戒。

なんでも近いうちに獣人が襲撃を掛けてくる可能性が高いのだとかもしかしたらもつと面白いものさえ・・・と焦がれるように笑つていた事が印象的だった。

あの方も何かに焦がれたりするんだ。

私はノイラー様に選んでいたのだ、期待を裏切らないよう全力を尽くそう。

目を閉じ自身の契約精霊である風の中級精霊と感覚を同調させる。彼女を見つめる精霊の物悲しい瞳に気付くことなく。

それから数日がたち、私の警戒網に何かがかかる。獣人だ。数は、  
15・・・16・・・17、全部で20。

それとまだ確認は出来ないけど、私のこちらに向かってすじい速さ  
で近づく強い存在感を感じる。

マナが大きいわけでも、別の力に干渉されているでも無いと言つの  
に空気が震えている。

これがノイラー様の仰られていた面白いもの、竜だらう。  
私はそれを伝えるため急ぎ主人の元へ向かうのだった。

私は今、自分の愚かさに猛省している。

報告を急ぐあまりノイラー様の部屋に入り、あまつさえ会話の邪  
魔をしてしまった。

「申し訳ありません」

主人の邪魔をするなど言語道断。

不良品として破棄されても文句は言えない。

死を覚悟する私にノイラー様はお叱り一つでお許しくださった。  
続いて報告を促される。

私は侵入者が近づいていることをお伝えする。

するとノイラー様は少し考える素振りを見せ、私に命令する。

「お前は騎士団に付き獣人の相手をしろ。可能であれば捕獲してお  
け。最悪死体でもかまわん。捕まえ次第戻つて來い。俺は調停者か  
もしれない者に興味がある。では行け」

私はノイラー様に顔を向けるとその意図を理解する。

名譽挽回のチャンスを与えてられているのだと。

私は自分のミスを取り返すべく、全力を持って戦いに赴くのだった。

## 番外編「I（アイ）」（後書き）

読み直してて思つた。

これ・・・本編に普通に埋め込めたんじやない？

そんなこと言つたつてもう遅い；；

もつと全体を把握してストーリーを作れいたら番外編なんてなかつた！！

精進します。○・△

## 第1話（前書き）

ノ「前書きは我々、帝国軍が支配した…これより前書きはすべて我々の管理の下、進められることになる」

ア「今のままだと当分出番無いそうですからガンガン読者様に媚を売るしかありません！草食系の時代は終わりました」

ヴア「次回から本格始動します。でも反応次第で打ち切りだつて作者が言つてました。張り切つていきましょう」

作者「実は今までのがプロローグだつたのさ…！」

ア「私たちの戦いはこれからだ…！」

ヴオ「ケロい人先生の次回作に」期待ぐだ

ノ「おいやめる」

ああ・・・身体が重い。

それに全身汗っぽい。

暑い、暑い暑い暑い。

目が覚めてからずつと頭がぼーっとしてる。

こんな野ざらしな場所で寝てたから風邪でも引いたのかな。

そもそも何でこんな野ざらしの場所で寝てたんだろう？

あれ・・・何か忘れているような。

あーー、ダメだ。頭が働かない。

のどが渴いた。

それになんかすっごいお腹減ってる。

せめてこの渴きだけでも何とかしたい。

一步足を踏み出すことさえ億劫だ。

「あつ・・・」

足がもつれた。

踏みどどまるこども出来ずに倒れこむ。

「おお〜・・・地面がひんやりとしてて気持ちいい」

そのまま倒れたままボーッと横をしていると遠くのほうに人型の何か

いるのがみえた・・・ような気がした。

人型の何かって言うのは、一本の足で立つてて、腕も一本で・・・

つまり翼とか余計なものは無いってこと。

さつきからフラフラなんだ。景色が震んで見えてるのに人型ってだけでも気付けた自分を褒めてやりたい。

人・・・かな？エルフや魔族がこんな所にいるわけないし。

尚もそちらを見続けていると、向こうもこちらに気付いたのか近づいてくる。

助かった・・・かな？盗賊や追？でもない限り水くらいは恵んでもらえるよね。

ちょっと安心。とりあえず命を繋いだみたい。

この辺りには・・・自分で言つのも何だけど小さな村がいくつかあるだけだ。

でも、山を挟んで帝国に隣接しているせいで何かあればすぐに国から兵隊が派遣される。

そんな場所に陣取る物好きなんていない。

やつと顔が分かるくらいにまで近づいてきた。

ちょっと痩せ細つたながらもそれなりに鍛えられているのが分かる

身体。

レザーメイル  
皮輕鎧を身に纏い腰にはナイフ。

冒険者かな・・・。あれ?こんな何も無いところに冒険者?

あ・・・もうそこまで来てる。

ナイフをこっちに向けて何か言つてる。

まあ・・・こんなところで人が倒れてたら怪しいと思つよね。

それにしても・・・この嗅いだことのある嫌な臭いはなんだか。目線だけを近づいてきた冒険者(?)に向ける。

あれ・・・あのナイフちょっと赤い。

それに皮輕鎧もこりこり汚れてるな。

そつか、魔物と遭ったのか、食料となる動物でも狩ったのかな。  
その返り血でも浴びたのかな。

それにしても喉が渴いた。

もう本当に何でもいいから飲みたいな。

そういうえばあの時の血は最高に美味しかったな。

何て言つたか・・・アレを口にしたとき“生きてる”って思った。  
ん?

アレってなんだ?

あの時つていつだ?

それに・・・この手に持つてるのはなんだ?

でも今はそんなことはどうでもいいや。

興味も無いのでそれを投げ捨てる。

そんなことより喉が渴いた。

何か・・・何かないのかな。

そういうふさつき近くに来ていた冒険者（～）さんばかりに会つたんだろ？

薄情な・・・。

ん？

向こうから良い匂いがする。

そうか、さつきの人は倒れてる僕を見て、仲間よ呼びにこつたに違いない。

身体を冷やしたおかげかさつきに比べ、身体は軽い。

「もう少しくらいなら歩けるかな。それに助けてもらつのを待つてるだけなんて性に合わないしね」

僕はフランフランと匂いを頼りに足を向けるのだった。

## 第1話（後書き）

前書きを書いていたが、やがていつの間にか、

あとタイトルが思いつきませんでした。。。

## 第1・5話（前書き）

ノ「いつもの小数点ですね」  
ア「おとなしく一話にまとめればいいのにね」  
ヴァ「作者に多くを期待してはいけません」

俺たちは蒼牙盗賊団。盗賊団と言つても7人だけの小さな集団。それも結成してから約一年の素人集団。

盗賊団とは名ばかりで、ゴロツキが群れているだけ・・・まあそれが今俺たちだ。

でも俺たちだつていつまでも素人<sup>ルキ</sup>のまじやない。

役割分担もフォーメーションも十分に形になつてきた。

とはいへ、そんな俺たちがすぐに盗賊団としてやって行けるほど世間は甘くない。

この国はそれなりに治安が良い。10貴族と言われる奴等が各地を管理していて、こいつらがまた強いことこの上ない。

何でも血を濃く受け継いでいる家系で、精霊を俺たちに比べてうまく扱えるんだとか。

それに下手に手を出すと国が動く。

厄介なことこの上ない。

大きな盗賊ならともかく、俺たちなんかじや歯が立たない。

護衛も数人しかつけない本当に小さな商隊の襲撃や盗みを繰り返す日々。

そんな時、俺たちにチャンスが舞い降りてきた。

このインハルテ領の端、山脈を境に北の帝国と隣接している小さな村が何かに襲われて壊滅状態だつて。

たまたま襲つた商隊の男から聞き出した情報だ。

娘を人質にとつて問い合わせるとすぐにはきやがつた。

男の話では最北にあるその村に月に一度の行商に立ち寄つたところ

見るも無残な姿にその形を変えていて

戦々恐々としながらも村に足を踏み入れるとあたり一面に血痕があり急ぎ引き返してきたんだと。

すでに何かに荒らされた後だつたんだろ。

しかし町がそこまで荒らされていたってことは俺たちと同じタイプの人間の仕業ではないはずだ。

町ごと荒らしちまつたらお宝を回収できなくなつちまうからな。

Sランクか新種の魔物でも現れたか？

まあ、男の話を聞く限り危険はすでにさそつだ。

てなもんだから、俺たちが残されたお宝を頂いちまおうつて相成つたわけだ。

どうせ、死人が持つていてもあの世じゃ使えないんだ。

俺たちが有効活用してやろうつてんだ。

他の奴等に先を越されてもいけないからな。

俺たちはすぐにその村に向かうことにしたよ。

ああ・・・もちろん商隊からは娘と馬車を積荷ごと頂いたけどな。娘は奴隸市でそれなりの値で売れるんだこれが。

一応他の奴等殺しはしなかつたんだ、良心的だろ？

何も持つていなくても・・・一番近い村まで生きてたどり着けるかもしれないだろ？

俺はそんな自信ないけどな。

日が数回昇つた頃に俺たちはその村に着いた。

まあ・・・聞いていた以上に酷い有様だつた。

だが俺たちにとっちゃありがたいことにそこらかしこに武器や防具が散らかつている。

それに崩れた民家を掘り返すとそれなりに金も出てきた。

小さい農村ではあつたがそこまで苦労も無くこれだけの物が手に入つたんだ。

実にツイてる。

それに数人だが金持ちが混じつていたのかそれなりの装飾が施されたネックレスやイヤリング、指輪も出てきた。

なかにはどうしても外れなくつて、身体ごと切り落としたのもある

が。

そういうのを専門に扱う奴等だつているしな。  
問題ない。

一通り村を回つ他頃には、日も暮れてきていた。  
しかたないので俺たちは村の近くで一夜を明かした。  
ちなみに魔物の類なんて影さえ見当たらなかつた。

そうそう、例の娘だが、ちょっと痛めつけてやつたら静かになつた。  
もちろんそこまで酷いことははしてないぜ？

大事な商品だからな。

その翌日俺たちはちよつとした好奇心から村の近くの平野を訪れる  
ことになる。

とこうのも、昨日村の探索をしているときに崩れずに残つていた高  
台のような場所にのぼつてな、見回すとその一辺だけ草の一つも生  
えてない場所を見つけたんだぜ？

気にならないほうがおかしい。

今にして思えば浮かれていたんだが。

蒼牙盜賊団を結成して初の大収穫だつたからな。  
俺たちはそこで少し早い昼食をとることにする。

仮にあの商隊の男が近の村にたどり着いていたとしても・・・いや、  
順調に進んだとしても着くのは今夜つてところだ。  
もう少しぐらじゅつくりしたつてかまわないだらう。  
もちろん一応見張りはたてておく。

と、飯の準備をしていると見張りをしている男が何かいると騒ぎ出  
す。

俺はそいつと一緒に何か見つけたつて言つまうに足を向ける。

なんだこいつ・・・女？何でこんなところで、それも裸で寝てんだ？  
息も絶え絶えと言つた様子だ。

もしかしてさつきの村の生き残りか？

それなりに整つた顔をしている。

奴隸として売り払つたらそれなりの金になるだらう。  
かといつて生かしておくるのは危険……か。

連れ帰るか、さつさと殺しちまうか。

俺がそんなことを考えていると期待に満ちた目で声を掛けてくる。

「おいつ、俺が見つけたんだ。かまわないだらう?」  
まあ・・・そうだな。

すでに十分な儲けはあるんだ。

危険な橋を渡る必要も無い。

それのみんなストレスも溜まつてこいる。

ここら辺で一発樂しむのも悪くはないかもしれない。

「好きにしろ。ただし、まだ殺すなよ?」

「分かつてゐるつて」

俺はみんなに伝えるためにこの場を後にする。

それには人がするのを見て楽しめるほど俺はまだ外れてはいない。  
すこし距離を空けた頃・・・悲鳴が聞こえてきた。

元気な奴だ・・・ん? 悲鳴?

俺が振り返ると一ードサリリーと足元に何かがとんできた。

そこにはあつたのは・・・頭?

それもよく見知つた、この一年間一緒に仕事をしてきた見間違える  
はずの無い仲間の顔があつた。

顔だけがあつた。

驚きに声が出ない。

向こうを見ると先ほどまで倒れていた女が口元に血を滴らせゆつ  
り・・・フラフラとおぼつかない足取りでこちらに近づいてくる。

俺はその女に剣を向ける。

盗賊が好んで使うククリナイフと呼ばれるタイプの武器だ。

無手の女に・・・とは思つが仲間が殺されているんだ油断は出来ない。

女にその刃を向けゆっくりと後退する。

この女からは何か嫌な感じがする。

しかし、俺の意識は数歩下がつたところで消えることになる。

一瞬、数秒にも満たない時間だったと思う。

女から意識を逸らしてしまったのが悪かった。

しまった、と思ったときには手遅れだった。

すでに俺の目の前には女がキスできるほどの距離まで迫っていた。

そして・・・。

この日俺たち蒼牙盗賊団は誰に知られる無く、本当にあつけなくその幕をおろした。

## 第1・5話（後書き）

割と王道系ファンタジーのノリになつたあるのではないでしょうか？

でもこの先もそつだとは限らない！

それが作者のクオリティー。

よろしければ今後ともよろしくお願ひします。

## 第2話（前書き）

ノ「そろそろ作者のストックがピンチだという情報を掴んだぞ」「ア「一人でもこんな駄作を読んでくれる読者様がいるんです。寝る間も惜しんでがんばれ！」ノ「いる・・・のか？」ヴァ「寒くなつてきました。みなさん健康には気をつけたがいい」「ね」

「ん、ん・・・」  
僕が目を覚ましたのは夕日が今にも沈もうとしている頃だった。  
つい先ほど（？）まで感じていた喉の渴きはだいぶマシになっていた。

くしゅんっ！  
ちょっと寒い。

あれだけ動いて汗をかいた後にこんな野ざらしの場所で寝てたのなら身体が冷え切つてしまふのも当然か。

ん？

動いた？

そんな激しい運動をした覚えは・・・ないよね？  
あ～、でも結構歩き回っていたような気がする。  
どうだつたつけ・・・思い出せない。

そういうえば最後に誰か・・・人を見たよ。ついでに辺りを見回すと何かが落ちているのに気がつく。  
ずいぶん痛んでいるナイフが数本。

それに・・・血？まだ乾ききっていないのを見ると少なくとも昨日のものと違う事は無いだろう。

あれ・・・なんでそんなこと分かるんだ？  
ん？そのまま流しちゃっていたけどなんでこんなところに？  
そもそもここどこ？

つてそんなこと考へてる場合ぢゃない。

ここは安全ぢゃあないみたいだし・・・っと、念のためにナイフを一本だけもらつていぐ。

「何も無いよりはいいよね？こんなところぢゃ何があつてもおかしくないんだし」

少し歩くと、荷馬車が田に付いた。

あ・・・あれは毎月うちの村に行商にきていた商人さんの馬だ。  
無駄に目立つ黄色いベアの刺繡が見え、核心を持つ。

そもそもこの辺りに来る馬車なんて数えるほどしかないんだし間違いないだろ。

もしかすると帰り・・・なのかな？

いつの間に来てたんだろう。

そういうえらうちの収穫祭にあわせて商売にくるって言つてたつて。  
ウチみたいな娯楽の少ない田舎だとこう言うイベント事ではみんな  
つい財布の紐が緩むからね。

そんなことを考へている間にもう少し今まで近づいていた。

「すいませ～ん、村まで・・・はおじがましいか。今晚だけでも「  
一緒させて」

つて誰もいない。

そういうえらさつきの血痕・・・まさか盗賊に襲われた？

この辺りに盗賊なんているはず、いや後にしよう。

盗賊に襲われたんだとしたら荷馬車に手をつけないはずが無い。  
商隊のみんなが見当たらなってことは・・・つまりそういうこと

だろ。

なら・・・どこかに潜んでいる？

見張りも置かずに？

不自然なことが多すぎる。

と、視界で何かが動いたのが見えた。

つ！？？

僕は先ほどのナイフをそちらに向ける。

「ひつ

か細い悲鳴が聞こえる。

女の子・・・それも

「子供？」

目を凝らすとそこには縮こまり身を震わせる小さな女の子の姿があ  
つた。

おかしいな・・・この商隊にこんな小さな女の子いたっけ？

娘さんもそれなりに大きくなってきた・・・とは言っていたけどまだ3歳にも満たないから行商の際はまだ町で留守番してゐるって言つてたような。

そんなことより初対面で悲鳴を上げられるなんて・・・ショックだ。もしかして盗賊の仲間と勘違いされてる？

「あつ、僕は・・・」

誤解を解こうと少女に手を伸ばす。

「静かにしますから。こっちに・・・こっちに来ないで!」

少女は悲鳴を上げ拒絶を示す。

よほど酷い目にあつたんだろうか。

でもこんな小さな子供が盗賊に襲われたのなら・・・これくらい怯えていても当然か。

「また明日、明るくなつてからもう一度来るから。そのとき落ち着いてお話しようか」

なるべく優しい声で言つ。

僕の言葉は彼女の耳に届いたんだろうか。

でももう暗いことだし明日にしよう。

明るくなつてからならもう少しともに話が出来るかもしれない。

僕は荷馬車から降りるべく回れ右する。

すると馬車の出入り口の陰、丁度入り口からは死角になつていた辺りにまとめられた荷物の中に全身を覆えるほどのサイズのロープを見つける。

悪いとは思ひながら僕はそれを借りることにする。

驚いたことに大きさはほぼぴったりだった。

その後僕は馬車のすぐ近くで火を起こし睡魔と闘う長い一夜を過ごすことになるのだった。

翌朝、太陽がのぼり明るくなつてきた頃僕は行動を開始する。

大それた事をするわけじゃない。

お腹が減つた。

それだけだ。

例の少女とも話をしないといけないけど、まずはご飯だよね。

彼女もまだ何も食べてないはずだし。

僕は朝食の準備に取り掛かつた。

といつても食材は荷馬車から拝借したい、こんなところじや作れる  
ものも限られている。

見つけたパンとハムを熱して挟んだだけだ。

僕が彼女の元に向かうとすでに彼女は目を覚ましていて、今は僕を警戒するように見ている。

昨日は暗くて気付かなかつたが、彼女はまだ10にも満たない子供といったところだろう。

左右に分けた黒い髪と青い瞳特徴的だ。

後5年もすれば多くを虜にする立派な女性になるに違いない。

苦笑しながらも僕は彼女の分の食事を差し出し、自分のものに手をつける。

しかし、彼女は手をつけようとしない。

いきなり現れた見ず知らずの男のだしてきた食事にそつそつ手を出さないか。

小さいのになかなかしつかりしている。

僕はどうしたものかと悩んでいると——ぐう——とお腹のなる音が聞こえた。

彼女に向けると顔を少し赤くして俯いている。

「ははは、何も変なものは入つてないから安心してほしいな。僕は君と少しあ話をしたいだけだしね」

彼女はこちらを覗うように見つめてくる。

あっ、そうか。

僕はいま全身を隠すようロープを羽織っている。

怪しさ全快だよね。

僕はロープのフードになつてている部分を外し、彼女に顔が見えるようにする。

昨晩の間に顔も洗つてはいるし強面つてわけでもないし……すこしでも警戒を解いてくれればいいんだけど。

「大丈夫だから……ね？」

彼女は尚も固い表情のままも、食事を口にする。

彼女が食事を追える頃を見計らつて僕は話を始める。

「僕の名前はウイル。君は？」

まずは自己紹介からだ。田舎なコミュニケーションには自己紹介が必須だ。そうだよね？

「…………エリー…………です」

耳を澄ましてなんとか聞き取れるつてくらいの小さな声で彼女は答える。

「そっか、エリーちゃんつて言つのか。えっと……辛い所悪いんだけど何があつたか話してくれないかな。僕は昨日この荷馬車を見つけたばかりで何が何だか分からんんだ」

彼女は僕を、僕の心を見透かすかのように見つめ続ける。ちょっと気まずいけど……目をそらすのはマズいよね。すこしして、彼女は話し始める。

それは拙いながらも丁寧な説明で

「…………」

そっか、そんなことが……大変だったんだね

僕は彼女の頭をなるべく優しく撫でる。

彼女は一度大きくびくつと震えたものの僕の手振り払うことは無かつた。

僕は彼女を撫でながら今聞いたことを考えを巡らせる。

なんでも彼女は新しくこの商隊に参加した一家だそうで、行商先の村に着いたはいいが村は何かに荒らされた後で、報告のため急ぎ町に帰るところだったそうだ。

そこを運悪く盗賊団に襲われ一網打。動搖していた護衛も隙を窺  
れてみんな殺されてしまい、商隊は放り出され、彼女だけ連れ去ら  
れてきたのだとか。盗賊団は僕が顔を出した日の朝姿を見せただけ  
でそれ以降ばつたりだつたとのこと。

その場で商隊が皆殺しきされなかつたのは・・・魔物の田をそちら  
に向けるためか。

そして、一番高く売れそつなーー幼い奴隸はその筋では高値で取引  
されているらしいーー彼女だけを攫つてきた。

盗賊団の姿が見えないのは・・・僕が目覚めたときに見たあれかな。  
仲間割れでもあつたのか、それとも魔物に襲われたのか。

それにしても行商隊に参加したばかりでその先が無くなつていて、  
その上盗賊に襲われるなんて・・・酷い話だ。

・・・・・・・・・・・・

ん?

村が荒らされていた?

なにか、何か大切なことを忘れている気がする。

喉元まで出ているのに後一步が思い出せない。

嫌な予感がする。

一度村に急いで帰つたほうが良いきがする。

「エリーちゃん、僕は一度僕の村に帰ろつと想つ。そこまで僕を一  
緒させてもらえないかな。村に着いたら、父さんたちに相談してエ  
リーちゃんを元の村に、この商隊さん達の元に送り届けてもらえる  
よう頼んでみるよ。ここで何もしないよりは何倍も良いと思つんだ  
けどどうかな?」

僕は彼女に話を持ちかける。こんな場所に一人放つておくことなん  
て出来ないし・・・村まで結構距離がありそだから僕も助かる。  
僕の提案にすこし悩む素振りを見せるも彼女はうなづく。  
すこしして、僕達は村を目指して荷馬車を進めるのだった。

## 第2話（後書き）

ヒリーちゃんは強い子！

こんなことがあっても生きる意思を捨てません。  
子供でここまで強い意志をもつているなんてすごいことですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4649z/>

---

タイトル未定

2011年12月19日17時46分発行